「日々の理科」（第 2955 号）　2022,-9,-9

「アルミホイルの玉づくり（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

アルミホイルに「表と裏」があることを、担任はよく説明していた。金属光沢の強い---つまりキラキラした面を「外側」にして丸めたほうが、ピカピカのアルミ玉を作りやすいことになるからだ。

これが「１人分（１個分)」のアルミホイルだ。30cm×50cm ほどの大きさだが、これは 100 均の薄手の商品なので、かなり小さくなる。「がんばらなくても」直径 3cm 程度、「がんばると」直径 2cm 程度までは、子どもでも圧縮可能だ。

子どもたちは説明をよく聞いていた。金属光沢の強い表面を外側にするために、光沢の弱い裏側を上にして巻き始めている。しかし中には、表も裏も関係なく、手っ取り早く「グチャグチャ」に丸めて、それでもそこそこうまくいっている子どももいた。

最初は「おにぎり」を作る時のように、両手で握って丸くしていく。この時点では、ほとんどの子どもは「軽い！」と感じている。

少し小さく硬くなってきたら、机上や床で叩いて、少しずつ「球」に近づけていく。「出っ張っている箇所」を叩くのがコツだ。そうすると自然に球に近づく。

10 分もがんばると、何となく球に見えてくる。しかしまだ、いかにも「アルミホイルを丸めたもの」としか見えない。面白いのはここからである。